
おもいで巡る空

江流素朗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おもいで巡る空

【Nコード】

N4796T

【作者名】

江流素朗

【あらすじ】

結婚式前夜にそれはおきた。

高校時代の終わらせる事が出来なくなった恋愛を終わらせるため。

心から抜け落ちてしまった恋愛感情を取り戻すため。

心の欠片の声に導かれた僕は、全てと引き換えに過去に戻ってやり直す事を決断する。

そして、これは僕の願望でもあった。

前夜に

結婚を翌日に控えた独身最後の夜、部屋の明かりを落とし飲みほしたコーヒーマグの空き缶を片手に、それを見つめながら彼女と歩んだ二年間を振り返った。

「あの日、缶コーヒーマグをご馳走して終わるはずだったのに、その約束を忘れたために結婚することになっちゃったのか」

ちよつとしたゲーム感覚で行った遊びの結果で、些細なきっかけであつた。

しかし彼女の事が好きだからゲームに誘つた訳ではなく、たまたま近くにいたのが彼女だったので声をかけた。

ただ、それだけのことであつた。

「なんで、こんな事になっちゃったのかな」

彼女に対して申し訳ないと思うが、恋愛という感情は結婚を翌日に控えた今でも抱いていない。

それはきつと十年ほど前、まだ高校生だった頃の終わっていないいや「終わらすことが出来なくなつてしまつた」恋愛が今でも心の中で隠れた小さな火種のように燻り続けて僕を縛っているからだろうか。

それよりもなにより僕はあの時以来、心の中の何かが抜け落ちてしまつたかのように、人を好きになつたり、恋をしたり、ましてや愛したいなどという感情が湧いてこなくなつてしまつた。

「はたして、僕自身の決断は正しかったのか？」

彼女と付き合いだしてからの二年間、「相性が良い」とか「一緒にいて疲れない」などと僕自身、心に言い聞かせながら付き合ってきた。

（何事も無ければ、これから何十年という長い時間を、彼女と過ごさなければならぬ、はたして今の心のままやっていけるのだろうか。

出来る事ならここから逃げ出したい。いや、あのときに戻りやり直したい）

「この地方の天気は雨でとこにより強く降るでしょう。

お出かけの際は傘を忘れずお持ちください。

さて日付も変わりまして最初のニュースです……」

考え込んだり、思い返したり、そんな事を繰り返していると、照明の代わりにつけていたテレビから日付が変わった事を知らせるニュースキャスターの声が聞こえる。

「雨が……やっぱり雨男だな……でも、変に重たい曇り空よりいいか……」

一瞬、今は思い出さくない記憶が蘇りそうになったが、慌てて首を振りそれ以上考えないようにした。

「さてと、どのみち考え込んでも今更どうしようもないし、なるようになるか。

朝が早いからもう寝よう」

手に持った空き缶をテーブルに置き、ベットに潜り込んで目を閉じてみるが、これから始まる新たな生活の緊張感や不安感、それよりもこんな気持ちの僕と結婚する彼女に対する罪悪感からか、いろ

いろいろ思いが巡り中々寝付く事ができないでいた。

前夜に（後書き）

はじめまして、

ここまで読み進めていただき、ありがとうございます。

欠片の声

……どれくらい時間が経ったのだろうか。

寝ていたのか起きていたのかわからない意識の中、どこからともなく声が聞こえる。

『……主様……届きませんか』

どこかで聞いたような覚えのある懐かしい雰囲気の声が、変な緊張から深い眠りにつけないでまどろみの中を漂っていた僕の意識に、直接語りかけてきた。

「何？ ……誰……」

夢か現実か区別がつかないまま、僕は問いかけた。

『私は主様と共にありながらも、その存在を忘れ去られている者です』

「……僕の中の人？ ……なんだかわからないけど……」

眠りかけていた頭を突然起こされたため、未だに思考が停止している。そんな状態では、何が起きているのか、何を聞いているのか、そして何と話をしているのか全く理解できなかった。

『私は主様が時の狭間に置いてきてしまった感情であり、心の空白を埋めるための一片の欠片です。そして私自身を主様の心の中に取り戻していただきたいのです』

あまりに抽象的な物からの声と願いごと、そして何よりはっきり

していない僕の意識、それら全ての条件を満たす答えは「夢を見ている」と、結論を出すしかなかった。いや、そう考えれば事は簡単になる。

「オーケー、でもどうやって」

今、夢の中にいるというのが前提となっている僕は気軽に返事をした。

『主様、私とのこの会話が夢か幻想と思っているようですね。』

でもそれは違います』

「って、言われても……」

ようやく導き出した僕の結論をあっさりと否定されて、これ以上言葉が出なくなってしまうた。

『主様が否定したくなるお気持ちはわかりますが、現実です』

確かに……先ほど迄、聞こえていなかった近くの通りを走る車の音、目覚まし時計の秒針の進む音、そしてタイマーの切れていないテレビの音など、周囲の音がいつのまにか耳から聞こえるようになり、閉じているまぶたでも画面の明るさがわかるようになっていた。

「で……どうすると」

『私は一度だけ力を使えます。』

それは私自身の存在するための力のほとんどを使って行うとても強力な力です』

「って、言われてもなんだか……」

『主様の時間を巻き戻す事ができます』

「えっ……と、過去に戻ってやり直せるといふことかな？」

『私を居るべき場所に取り戻してただけなら』

「でも取り戻すもなにも、そうするためには存在するための力を使

うって……その力を使うとお前は存在出来なくなつて消えちゃうんじゃないのか？」

『私の全てが完全に消え去るわけではありません。しかし今のよう
に直接話をしたり、何かの力を使う事は出来なくなります。』

それでも今の主様の心があり続ける限り、今の私は存在する事が
出来ます』

「心があり続ける限りって、ちょっと意味深だな……って、力が使
えなくなるってことは、戻る事が出来なくなるという事なのか？」

覚めてきた頭で考えても理解しがたい現実と共に、次々とわき起
こる疑問を尋ねると、声は改まって語り出した。

『主様、これは重要な事ですので今お話をいたします。』

まず、私がこうして話す事が出来るのは、この一度だけです。

時間を巻き戻した時は、もう一度話す事が出来る機会があります。
しかしそれは一連の流れの中での事で、全てを含めて一度のみです。
そして今、主様が時間を巻き戻すことを拒みますなら、私には存
在の理由が無くなり、主様の中から私に関係する全てのこと、いま
でのこの会話の記憶も含めた全てが完全に消え去ることとなります
「って、つまりは過去に戻ってやり直す機会を作れるけど、そのチ
ヤンスは今だけ。』

ただし過去に戻つたならば、ここには戻つてくる事は出来ない。

で、今回を逃すと二度とその機会は無いということかな」

『はい、そうです』

はつきりとした口調で返事をされて、先延ばしは出来ないと思っ
た。

さらに声が言った通り事の重大さに何をどうしたら良いのか、な
んと返事をしたら良いのか考える事が出来ないでいた。

欠片の声（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

それでも戻るよ

(今はもつと冷静になって考える時間がほしい……)

この深刻な事態に対して、少しでも落ち着いて、冷静に考えるための情報と時間を稼ぐため、気になっていたことを続けて尋ねた。

「それと、ほら、なんとというか……あれだ……」

過去に戻って自分の都合に合わせていろいろとやり直すと、未来、つまり今が変わっちゃうってというか……ほらそんな話の映画とかよくあるじゃないか」

『主様の言いたいことはよくわかります。』

過去から今まで紡がれた時の流れは、幾度となく訪れた『選択の決断』で選んだ結果であり、ここまでの時の道筋は一本道ではなかったということでした。

どこか一つでも『選択の決断』で選んだ答えが変わっていれば全く違う道筋を通っていたこととなったでしょう』

「と、いうことは、やっぱり今が変わっちゃうんだ」

『そういうことになります。』

ただし、別の『選択の決断』を選んだ結果として、今が良くなるのか、悪くなるのか、私にはわかりません』

「って、なんだか勝手だな」

『申し訳ありません。』

でも、私は元の居場所に戻りたい、ただそれだけなんです』

ちよつとだけこのやり取りに不満を覚えたが、改めて事の重大さがわかった。

「夢なら良かったんだが……」

しばらく黙って考え込んでみると、せかされるように話が伝わってきた。

『主様、事の重大さに悩んでいると思いますが、こうしている間にも存在するための力を使っている私に許された時間は限りがあります』

「って、どれくらい残っているの？」

『はつきりとお答えすることはできませんが、あと数分、長くても十分程度かと思います』

残された時間は、本当にわずかなようだ。ただ、こうして考えていても時間だけを使い、答えを出せないでいる僕の背中を押すように声は続けて語りだした。

『最後に少しだけお話をしておきます。』

時間を巻き戻した時から次に私が話かけるまでの間、つまり『その時』を迎えるまでの間、記憶を封印させていただきます。

これは過去を全て知っている主様が、『その時』以前に違う道筋を選択してしまい、もしかすると私が存在できなくなってしまう事態をなくすためです。

そして、『その時』を迎えてどのような『選択の決断』を行った後でも、主様の存在は全て消え去り、新たな存在として時を紡ぐ事となります』

「えっ、記憶を封印されて『その時』まで過ごすのは良しとしても、その……最後は消えちゃうの？」

『残念ながら、『はい』と答えるしかありません。』

時の流れというのは水の流れに似ています。上流に戻って堰を閉じて流れを再び止めたとしても、一度流れ出した本流はすぐには止まらず、わずかばかりの細い流れとなって残ります。しかし供給の止まった流れは、やがては枯れて消滅します。

つまりそれと同じ事が時の流れでも起きて、しばらく残ってる今

の主様という存在も、やがては今へと続く時の流れと共に消えてゆきます。

例えば、『その時』に今と同じ『選択の決断』を行ったとしても、新たな主様となって時を紡ぐ事となります。』

「……………」

今の存在が消えてしまうという事を突きつけられて、僕は返す言葉が全く見つからなくなってしまった。

『主様、私が今ここにいるのは、あの時主様が心に思った、いや、誓った事をお手伝いしたいからでもあります』

声のこの言葉が迷っていた僕の背中を力強く押した。

(あつ、あの時の……………漠然と心に浮かんだ思いはこの事だったのか)

「わかった、巻き戻してもらおうよ」

『その決断は、先ほどお話した通り『今ある全て』が完全に消え去るということになります。』

本当にそれでよろしいのですか？』

「それが、僕自身の心に描いていた願望でもあり、そしてお前の望みでもあるんだらう？」

『もう一度だけ確認します。全てを消し去っても戻りますか？』

「かまわない、それでも戻るよ」

『わかりました。そして、感謝します。』

今一度、私の存在、恋愛という感情を思い出して頂くため、『その時』が訪れる一年前まで戻ります。

その募る思いが、主様の時を巻き戻したために空っぽになっていく私を満たして、『その時』に主様を呼び起こす力となります。

それでは、しばらく時の旅を楽しんでください』

声がそう告げて、この不思議なやり取りに終止符を打った直後、僕はまばゆいばかりの白光に包まれた。

どこに向かつていくのか方向が全くわからない白光の中、ゆらゆらと流れに任せて漂い続ける。

突然、僕を包んでいた白光が一点に向けて収縮を始めた。そして「何も見えない、何も聞こえない」完全な闇と静寂の世界が訪れた。どれくらい時間が経ったのだろうか、僕には時間を知るすべがない。何日もこの不思議な空間を漂っているような気がした。いや、それはほんの一瞬の出来事だったのかもしれない。

突如、何も無かった空間に現れた白光の小さな点から、光の粒が放射状に吹き出し僕の周りに飛び始めた。

最初は白い光の粒だったが、この闇の空間を着色するかのごとく、徐々に七色の色彩を帯びていく。

やがて粒はつながり七色の線となり、縦横交差したその七色の線は、織物が織られるように面へと変化し、そして織り上がった面は組み合わされ現実感のある形に変化し、幻想的な世界の終わりを告げる。

目を開けて周りを見渡すと見慣れた教室の中にいた。

「あつ、本当にタイムスリップして戻ってきたんだ」

この言葉を最後に僕の記憶は封印された。

そして感情の欠片を取り戻すための高校生活が始まった。

それでも戻るよ（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

この話で一区切りつきました。

次回からは高校生に戻った主人公の話となります。

巡る時 1

「起きたかね」

声が聞こえてくる方に視線を向けると、中学時代からの悪友「飯山」がいた。

「授業が終わったと同時に目覚めかい？」

試験が近いのに余裕だね。さすが万年ど真ん中……おっと失礼、今では優等生か」

「ふっ、あれは負の特殊能力の一つで、これが実力だったのだよ」

中学時代の僕は五段階評価で表される成績でど真ん中を貫くオール3を、そんなに勉強する事なく毎度のようにいただいていた。ある意味、便利な特殊能力であったかもしれない。しかし真面目に勉強しても発動してしまうという非常に残念な特殊能力でもあった。

ところが、名ばかりの共学であるこの工業高校にきてから、特殊能力は鳴りをひそめてクラス、それどころか学年でもトップクラスの成績を収めて続けている、ある意味優等生となっていた。

(……………専門科目だけです……………)

普通科目は……レベルの低いこの学校ですら相変わらずど真ん中の成績であった。

中三時代を真面目に過ごしていたら、一、二ランク上の普通高校の高校に行っていたかもしれない。そうなるのかなり危ない成績だったと思う。

ある意味、荒れていた中三時代に感謝です。

「さて、昼飯だぜ」

飯山はそう言うと、半分に減った弁当を取り出し続けて尋ねてき

た。

「あれから三ヶ月くらいか。」

お前、『真菜ちゃん』とはうまくいつてるのか？」

「もちろんだよ」

「今までのお前だと、ぼちぼち悪い癖が出てきそつで少し気になっていたんだ」

中学に入学して直ぐに僕は、とある女子に一目惚れをした。

そしてなかなか思いを告げる事が出来ないまま二年間が過ぎ、そして三年になってクラスが別れたのをきっかけに思いを告げた。

「何言ってるの今更、馬鹿じゃない、私があんたに気がない事、知ってるじゃない」

二年もの間、気持ちを隠せる程器用な人間ではない。当然僕の気持ちを知っていた彼女の返事に半ばヤケになって、こんな風に考えるようになっていった。

(思いは暖めるもんじゃない。とりあえず、付き合い出してから作り出せばいい。)

そして、思いが生まれなければ、相手を変えてしまえばいい)

受験勉強で忙しい中学三年生にも関わらず、そんな事はそつちのけで、この考えを実行するかのごとく、その後の僕は何人も女子に声をかてまわった。

しかし例え付き合う事が出来たとしても、長くて三ヶ月、早ければ一ヶ月経たないうちに、思いを生み出せない僕自身に苛ついて、別の女子に声をかける嫌な奴となつていった。

そして僕のこんな考え方を知っている飯山は心配して、こんな話をしてきたのだろう。

「気を使わせて悪いな。」

でも真菜は僕自身大切にしたいから、大丈夫だよ。

それに、こっちがおかしくなったらその反動でお前たちもおかしくなっちゃう可能性があるだろう」

飯山は僕と真菜の間を取り持つてくれたから、こっちの都合で変に迷惑をかけるわけにはいかない。

「おうよ、それが一番心配なんだよ」

「それより飯山、お前たちの方こそどうなんだ？」

「俺たちは、そりゃもうラブラブで青春街道まっしぐらだぜ」

さっきまで心配顔だった飯山の顔がだらしなく揺るんでそう答える。

「おい、戻ってこーい。アーンド死後連発禁止だぞ。」

まっ、とりあえずはごちそうさん。いい顔してるぜ」

「あつ、ちよつと便所行ってくる」

照れ顔を見られた飯山は、ばつが悪くなったのか席を立てて教室から出て行った。

話を中途半端に振られて、一人になった僕は真菜との出会いを思い返した。

巡る時 1 (後書き)

読み進めていただき、ありがとうございます。

巡る時 2

この四月、高校に入っただけで、強制されてはいなかったがテニス部に入った。

しかし名ばかりの練習に、毎日雀荘や闇カジノとなっていたタバコ臭い部室に嫌気がしていた。

こんな弱小クラブだったので七月の大会もあっさり終わった。そして危ない三年生達がいなくなり、優しい二年生が仕切り出すのと同時に僕はテニス部から帰宅部に転属となり、高校初の夏休みを迎えた。

「帰宅部になったって？ 暇ならバイトしないか？」

帰宅部に転属した僕の話はどこで聞いたのか、夏休み初日の朝一番に元々帰宅部だった飯山がバイトに誘ってきた。

「オーケー、やるよ」

僕は何も考えず、二つ返事で了解した。

「助かったよ。急にやめた奴がいて、店長に頼まれたんだ」

「でも、バイト経験は全くないけど、大丈夫か？」

つい先日まで中学生の僕は、当然バイト経験はあるはずもなく、その上やめた人の代わりと聞いて不安を覚えた。

「そいつも入って仕事を覚える前にやめちまったから大丈夫だよ」

「……わかった。で、いつから？」

「明日十時に店に来てくれっか、店長が簡単に面接するから」

「店って、どこ？」

「最近、街外れにファミレスが出来ただろ。そこだよ」

「了解」

かなり急な話だったが、とりあえず成り行きに任せる事にした。

快晴の夏空らしく、強い日差しが高いところから降り注ぐ眩しい

太陽の下、十時少し前にこれからバイトでお世話になる予定の店に顔を出して面接を受けた。

「以上です。ところで今日はこれから時間ありますか？」

「はい」

「今日からバイトに入ってもかまいませんよ」

「お願いします」

僕は店長に言われるまま、その日からバイトを始める事にして、制服に着替えホールに入ると、集められたスタッフ達に紹介をされた。

「初めてのバイトで、お世話をかける事が多いと思いますが、よろしくお願いします」

「ではこの後は、飯山君に教えてもらって下さい」

店の各所を飯山に案内され最後にキッチンに入った。

「で、まあ、最初は基本の皿洗いから」

「了解、飯山……先輩」

「ふっ、とりあえず皿割ってバイト料を赤字にするのはお約束だぜ」

「それってヴァーチャルな世界の話じゃないのか？」

「言ってみただけで、本当は知らん。」

最も今じゃ手洗いより食洗器がメインだから、そういう話は減っているみたいだ」

飯山は心の準備が出来てないうちにバイトをする事となった僕に、冗談を交えたいつもの会話でリラックスさせようとしたらしい。

そんなこんなでシフトの入れ替わる十六時を迎えた。

「初日はどうだった？」

「変に緊張して思った以上に疲れたよ」

「まあ、初めてだから仕方ないか。俺もそうだったし」

初めてのバイトで必要以上の緊張と慣れない事をしたためか結構疲れていた。

が……

「なあ飯山……」

一緒に上がったホールスタッフの女の子、同じ年くらいか？」

ロッカールームで着替えながら一日気になっていたホールスタッフの女の子の事を飯山に尋ねた。

「おっ、いきなりだね」

「いや……まあ、ちよつとね」

「大きい方が『ゆかりちゃん』、小さい方が『真菜ちゃん』、俺たちと同じ学年で二人とも同じ女子校に通っているんだ」

「そうか……」

確かにゆかりは、百七十センチに微妙に届かず身長にちよつとコンプレックスを持っている僕と比べて少し小さいくらいだが、そのスレンダーな体型と相まって実際の数値より長身に見える。そしてショートヘア効果もプラスされて、つい「部活は？」と聞きたくなってしまう。

もつとも、そんな事を聞いたら、目尻が少し上がった目で睨まれて「なんでそんな事を答えなきゃいけないの」と言われそうだ。もつともそれより先に肘が蹴りが飛んでくるような、ちよつと怖そうな一面も持ち合わせてるかもしれない。

（あくまでも見た目の印象の話であつて、実際にはそんな事は無いと思いますが……）

対して真菜は、百五十センチを少し超えたくらいだろうか確かに小柄である。特にゆかりと並んでいると、本当に同じ学年なのかと

思ってしまう。ともすると姉妹に見えてしまう。

それは身長差だけの問題ではなさそうで、腰まで伸びている長い髪の毛を、リボンの飾りが付いた髪留めで一つにまとめられているような少女的趣味も、見た目にプラスされているのだろう。

そして、やや下がった目尻におっとりとした口調がどこことなく癒しを与えてくれそうである。

(それにしても、見た目だがここまで違う二人が仲良くできるなんて、やっぱり女子は不思議だ)

「で、お前の好みは知っているから聞く迄も無いが、万が一心変わりがあつたかもしれないから一応聞いておく。

どっちの娘が好みで

「あつ……」

えつと……『真菜ちゃん』で……す」

「微妙な間が気になるけど、いつものあれか？」

「いや、違う。自分でもよくわからないが、真面目路線だと思う」

今日初めて会って、まだまともに話もしていないうちから、こういう感情を持ってしまふなんて、あの中学時代の苦い思いでしか残らなかった一目惚れの恋で懲りているはずなのだが……

しかし気になり出したものはしかたない。今後の対策を考えることにしよう。

巡る時 2 (後書き)

読み進めていただき、ありがとうございます

巡る時 3

「オーケー、ラジャー、ラジャー、まっかせなさい」

いきなり何かを思いついたように、飯山が怪しい発音の英語で喋りだした。

「へっ？」

「実は俺、ゆかりとお付き合っているんだ」

ちよつと照れくさそうに飯山が白状した。

確かに姉属性体質の彼には、見た目通りお姉さんに見える彼女は、ストライクかもしれない。

対して僕は……どちらかというと妹属性体質なのか？

とは言つものの、彼女たちは同じ年の同学年な訳だから、あくまでも見た目的な要素であつて、本質的な意味ではない……と思う。

僕自身に限つて言えば、「お兄ちゃんなんか、好きじゃないんだから……だって……だから……だっ、大好き……なの」なんて言われたと思つた事は無い……と言えば無いし、有ると言えば有るし……

どっちにしても、男兄弟しかいない僕にとっては、そんな事を言ってくれる可愛い妹が存在していないので、実際、それが嬉しい事なのかどうかはよくわからない話です。

（ちよつ、例えば妹が実在したとしても実妹にそんな事言わせちゃ、世間的、倫理的に駄目だろう！

と言つご意見はごもつともです）

唯一そんな事を言つても、世間が許してくれそうな、妹的幼馴染みも存在していないですし。

(……………つてか、何か思い出しちゃったぞ。

正月とか親戚が集まると「お兄ちゃん、お兄ちゃん……………」つて、べつたりの従姉妹がいたけど、あれつて、なんだか嬉しいような恥ずかしいような……………つと、もしかしてあれが妹属性体質になった原因だったのか?)

とりあえず、個人的な属性が外見のか本質的かはさておいて……………。

まあ、男も違う趣味を持っていても親友と呼べる付き合いが出来るみたいだ。

もつとも男の場合、好きな女性のタイプは違う方が良いかもしれない。

「やるもんだね。なかなか手が早いじゃん」

「馬鹿、お前ほどじゃないよ」

飯山は何か思いついたように続けて話し出した。

「俺、これからゆかりと遊ぶ事になってるけど、お前はこれから時間あるか?」

「ああ、大丈夫だよ」

「じゃあ、お前も今回は真面目っぽいから、ゆかりに真菜ちゃんを誘えるか聞いてみるよ。」

「オーケーならお前も来るよな」

「ありがたいね。断る理由も無いし、そうさせてもらつよ」

着替え終わった僕たちはロッカールームを出た。

「聞いてくるから、ちょっと待っていてくれよ」

そう言つと、飯山は女子更衣室の方に行つて、ゆかりを呼び出した。

着替え終わって出てきた彼女と飯山の話が終わり、一度更衣室内に戻った彼女がしばらくすると真菜と二人で出てきた。

先ほど感じた印象通り、バイト中に行っていた髪留めより、ひと回りいや、ふた回りほど大きなりボンで飾られた髪留めを付けて、フリルのヒラヒラが何力所か付いている少女的な服を着ていた。

（うん、うん、『真菜ちゃん』最高だね。

さすがに局地適応タイプのロリータ系じゃ、こっちも合わせるこゝとが出来ないけど、それなら一緒に並んで歩けるよ。

これは間違いなくストライクだね）

若さ故か、脳内では既に真菜ちゃんと二人で街中を歩く姿を描いて、つい顔が緩んでしまった。

そして、出てきたゆかりと話をしていた飯山の二人は揃って、意味ありげな怪しい笑顔でこっちを見た。

（あつ、顔！ しまった。

もしかしてあいつ、属性の話もゆかりちゃんに喋っちゃったか？）

飯山に手招きされた僕は変な汗を拭い三人と合流し、バイト先から近くの喫茶店に場所を変えて、自己紹介やたわいのない会話を楽しんだ。

店を出る頃には綺麗な夕焼け空に低く浮かぶ太陽がオレンジ色に街を染めて、翌日も晴天が約束された、でも初めて知り合った高一の僕たちが、もう一遊びするには時間が少し遅い夏の夕暮れ時になっていた。

（あれがきっかけで、真菜と付き合い出してからもう三ヶ月経つか。我ながら長続きするもんだ。飯山たちを気にかけてながらゆっく

りとやってきたのが良かったのかな。

そう言えば高校に入ってから、あいつにいろいろ世話を焼かせっぱなしだ。

まあ、あいつが好きでやっているならかまわないけど、いつかお返しをしないとけないな」

「また、何『ぼやー』つとしてるんだよ」

便所に行くと言って教室から逃げ出した飯山が戻ってきた。

「ああ、ちよつと思いい出してた」

「なんだ、Hか、スケベだな」

「馬鹿言ってるんじゃないよ」

「まあいいや、また今度四人で遊ぼうぜ」

「オーケー」

その後、僕と真菜の間で初めてのクリスマス、バレンタイン、ホワイトデーと恋の行事が訪れるたびに深く結びつき、二人の思いを強くしていった。

ひとつ歩みを進めるたびに心の中に出来た恋という火種は徐々に大きくなり、二人の間に作り出された恋愛という欠片が僕の心の空白を綺麗に埋めるようになっていた。

学年が一つ上がった僕と真菜は、逢うたびに何度も口づけをかわし、幾度か体を重ね合わせ、甘く優しく熱く、そして幸せな時を過ごした。

永く永く、永遠に続くと思っていて……。

巡る時 3 (後書き)

読み進めていただき、ありがとうございました。
ちよっと、遊びすぎた文面になってしまいました。
とりあえず、出会い編は終了です。

その時 1

僕たちが付き合い出して二度目のクリスマス为数日後に控えた街は、飾り付けられたお店の店頭に置かれたクリスマスツリーが、きらびやかなにぎわいに花を添える。人も多く、そこから聞こえるクリスマスソングもにぎやかに流れ、普段なら何かを期待するように心も軽くなり、この時期の寒さを感じさせないのだが……

この日は違った。

今にも落ちてきそうな黒く重い雲に覆われて、涙を落としたいのをこらえているような空模様と、時々強く吹きつける冷たい風が体や心を冷たく閉ざしていく。

そして軽いリズムのクリスマスソングや普段なら気にならない雑踏が、すごく耳障りな、耳を塞ぎたくなるような騒音となって耳に入ってくる。

(嫌な空模様だ。)

これなら雨が降ってくれた方がすっきりするのだが……)

待ち合わせの場所で重苦しい空を見上げ、ぼんやりしていると、ちよつとだけ遅れてきた真菜の声が聞こえる。

「おはよう、待った?」

「おはよう。ちよつと前に到着したところだよ。」

おっ、今日も可愛いね。そのクリスマスカラーのリボンは初めてだよね

コートの裾から少し見えるスカートのレースフリルの飾りや、大きなリボンの飾りの付いた髪留め、相変わらずの少女的趣味を押し

通すスタイルである。

「あっ、気がついてくれた。せっかくのクリスマスだし、雰囲気の出そうな色合いのこれが目に入って買っちゃった。」

……ちよつと派手かな？」

「似合ってるし、可愛いよ」

真菜の笑顔を見て重い気分を紛らわそうと、つい口走った言葉だった。

ところが急に照れくさくなって、真菜から視線を外そうとして空を見上げた。しかしこの空が目に入ったと同時に、無意識だったが溜め息を吐いてしまった。

「あー、溜め息を吐いた。やっぱり、変なんだ」

「あっ、いや、そうじゃなくて、この空が目に入った瞬間、なんだか嫌な空模様だなんて」

「そうよね。私、なんだか気分が重くて、デートをすっぱかしちゃおうかと思っただわよ」

「えっ！ それは勘弁、学校ならまだしもデートはすっぱかさないでくれよ」

たわいない挨拶代わりの会話だったが、この空模様のためか真菜も気分が重かったようだ。

今までのデートでもこんな空模様は何度かあったのだが、ここまですで気分が重くなった事は一度も無かった。

そのうえ今日は何かおかしな悪意を感じる。いや、悪意というより何かを警告しているようでもあった。

落ち着かない気分のまま、いつものように街中をうろろろしているうちに、お昼が近づき少しお腹が減ってきた僕達は、ファーストフード店に入ることにした。しかし相変わらず雑音が気になって落

ち着かない。

「なんだか騒がしいな……」

異常に耳につく雑音に我慢しきれないでつぶやく僕に真菜が反応する。

「うん、私もすごく気になる」

「静かなところに行こう」

一刻も早くこの耳障りな雑音から逃れたいという思いから、昼食に入ったファーストフード店で、飲み込むようにハンバーガーを食べそそくさと店をあとにし、とりあえず町外れの僕の家に向かって歩き出した。

部屋に入り暖房のスイッチを入れて、前日に借りていたDVDをセツトする。

二人並んでベッドに座ってしばらくは映画を見ていた。しかし、今までの滅入った気分から解放されて急に甘えたくなった僕は、真菜を抱き寄せ軽く口づけを交わしたまま二人でベッドに寝転んだ。

服の上から彼女の柔らかな胸に顔を埋め、しばらく静かにしていると、優しい息づかいと鼓動、そして温もりが安心感となって伝わってくる。

「どうしたの？」

街中の雑音から解放されて安心感のある空間に真菜の声が優しく響く。

いつもなら映画そっちのけで熱い二人だけの時間が始まるのだが、普段と違う行動の僕に彼女が問いかけてきた。

「ごめん、今日は甘えさせて」

そうつぶやいた僕が胸に埋めていた視線を彼女の顔に向けると、不満そうな表情で僕を見ている。その口からは「私が甘えなかったのに」と今にも言葉が出てきそうだった。

少しの間おいて彼女の口が開いた。

「いいわよ……」

そう言って、ちよつとだけ表情を緩めた彼女に包み込まれた。

どれくらい時間が経ったのだろうか。まわしていたDVDは終わっている。視界が現実に戻ると隣に真菜の寝顔が見える。心地よい静けさと温かさに身を任せているうちに僕たちは眠っていたようだ。ちよつとだけ休息を取ったためか、気分は少し軽くなった。しかし窓から外を見ると、相変わらずの重苦しい黒い雲に覆われた空が広がっている。時間も日が傾くころのためか一段と暗く目に映る。

「もう夕方か、ちよつとお腹がすいたな」

夢の中にいる彼女にそつと声をかける。

「夢の時間は終わりだよ」

「……うん」

目を覚ました彼女は、まだ眠そうな目を擦りながら体を起こした。眠っていた時間が中途半端だったためか、不機嫌な目覚めのようだ。

「街に戻って何か食べようか？」

「……うん」

「じゃあ、出かける準備をしなよ」

まだ目覚めきっていない彼女に髪や服を整えるように促し、僕は部屋を出て煙草に火をつけて彼女が支度が終わるのを待った。

立ち上る一筋の青紫煙を静かに見ながら考え込んでいると、なん

とも言えない不安感がまた心の中に広がっていくのを感じる。

(今日はどうしちゃったんだろう。この空模様の悪戯のなのか？
いや、それだけではない。何か嫌な事が起きそうだ)

「……………熱っ！」

気がつくと煙草の火がフィルター近くまできて指を焦がそうとしていた。

煙草をもみ消し、火傷しかけた指をちよつと舐める。

「お待たせ」

支度を終えた彼女が、先ほどまで青紫煙の作り出していた不思議な模様を散らすように入ってきた。

「指、どうしたの？」

「煙草の火で『ジュツ』と……………」

「馬鹿ね。未成年なのに吸ってるから天罰が下ったのよ」

「へっ、二十歳になってから煙草を吸い始める奴の顔を見たい」

どうやら支度しているうちに彼女の頭も起きて、寝起きの不機嫌さはなくなったようだ。

しかし、このまま煙草の話続けるのは旗色が悪いので、当初の目的に話題を切り替える。

「さて、馬鹿言っていないで夕食を食べに行こうか」

「うん」

静かな家を出て騒がしい街中に向かうのは気が進まないけど、と
りあえず二人で歩き出した。

途中重い気分を会話で紛らわそうとしたが、周りの雑音に割り込まれて話が續かない。

(落ち着いて座って話をすれば少しは会話も弾むかな?)

その時、ちょうど目に入った、街中に向かう通り沿いにあるファミリーレストランに入ることにした。

「ここ、ライバル店だけど、いいよね」

「偵察ということでオーケーよ」

しかしここでも、周りから聞こえる耳障りな雑音のためか、落ち着いた気持ちでの会話や食事とはいかなかった。

一時間半程の後、夕食を終えた僕たちが店を出ると、昼間でも暗かった空は、すべての光を飲み込んでしまったような星の輝き一つない漆黒の夜空と変化していた。

(今日は本当に何だろう)

普段なら気にもならない、それどころか普通に聞こえる街の音でさえ耳障りな音となって耳に入り、不安に揺れ出した僕の心をさらに揺さぶる。

(こんな日は早めに帰ろう)

「ちょっと早いけど、今日はもう帰ろうか」

「……………そうね……………」

意味ありげな間があいた後、それでいて素っ気ない返事に真菜の方を見ると、昼間に見せた不満そうな顔でこっちを見ている。

「あつ、それとも、もう少し遊んでいく?」
彼女の反応に慌てて付け加えてみた。

「もういい、帰る」

その日の最後に。なんだかわからないうちに彼女とちょっとした口喧嘩になってしまった。

それは些細な意見の食い違いと、僕そしてきたと彼女もちょっとだけ意地の張り合いになってしまったためだろう。

(やっぱりこんな事になっちゃた)

「じゃあ、送っていくよ」

「ここでいい、一人で帰るから」

そう言うと真菜は自宅方向に向きを変えて歩き始めた。意地になつていた僕は彼女の方を振り向くこともしないで歩き出した。

その時 1 (後書き)

読み進めていただき、ありがとうございます。

その時 2

二人が別々の方向に何歩か歩みを進めたそのとき、突然高い周波数の音が大音量で僕の頭の中に響き渡る。

「耳鳴り……か？」

しかしそれは耳鳴りとは明らかにレベルが違い、その音量は振動を感じるほどであり、その振動で脳が揺らされて意識が遠のいていく。

虚ろになった目に映る見慣れた街の風景から動いているもの全てが動かなくなった。

「何だ、何が起きているんだ？」

目の前で起きている事を薄れる意識の中で考えるが全く理解できない。

「あれ？ 体が動かない」

そして目に映る全てのものから赤色が消え、緑色が消え、最後には青色が消えて、「時が止まったモノクロームの世界」が完成するころ、僕の時間は完全に止まっていた。

『主様、お目覚め下さい』

聞き覚えのある声が頭の中に響きわたり、僕の止まった時間が動き出した。

正確には、声によって過去に送られた僕の意識が、今までの僕と

入れ替わり目覚めた。

そう、今の僕はこの後何が起きるのか全て知っている。そして心の空白を埋めるための「心の欠片」はここにあるという事もわかっている。

ここまでの事象を全て理解した今の僕に声の主が語りかけてくる。

『主様もお気づきの通り、ここに『欠片』はあります。そして『選択の決断』を行う時でもあります。

ここでの行動は、主様の心の空白を埋めるために最も重要となります。』

確かに今からの行動次第で今後が大きく変わるだろう。

僕が出来る行動は彼女をそのまま帰すか、引き止めるかの二つ。このまま帰すと今の僕が知っている心に空白のある生活となる。もしここで引き止めると、僕の知らない未来へと変わるだろう。

今まで何度も過去に戻る事が出来たなら、この時に戻ってなんとかしたいと考えた事が何度もある。でもこんな事が本当に起きてしまつと今ひとつ踏ん切りがつかない。

『周りを見てください。主様に残された時間は残り少ないのです』

「え！　今回もまた……なのか」

声に言われ周囲を見るとモノクロームの世界に色が少しずつ戻り出している。今回も残り時間が少ないというのは間違いないようだ。

『この後、いかなる決断であっても主様の存在は消えて去り往きま
す。』

今一度、記憶を呼び戻してください。』

声が語り終わると同時に、まばゆい白光に包まれた僕の意識は記憶の海に投げ出され、意識の奥深くに眠っていた記憶が鮮明に蘇った。

(そうだ、今日このとき、何が原因なのかわからないうちに口喧嘩になって、しかも変に意地になっていたから、お互い見送る事や振り返る事もしないで、こうして別々に歩みを進めていったんだ)

僕が何歩か歩き進んだときだった。

耳障りであつた街中の騒音を押さえつけ、ナイフで切り裂くような鋭くかん高い「スキッド音」が後方から耳に飛び込んできた。

振り向く僕に三枚の写真が視界というスクリーンに映し出された。

一枚目は「青信号の横断歩道を渡り出した彼女の後ろ姿」

二枚目は「横断歩道を横切る車」

そして三枚目は「彼女も車も見えない青信号の横断歩道」

別々に見せられても普段なら何の変哲もない写真であつた。しかしその三枚の写真はスライドショーの写真が切り替わるかのごとく機械的、断片的、それでいて連続して映し出された。

全ての音が「スキッド音」に切り裂かれ、その残響が消えると同時に無音の世界が僕に訪れた。

「えっ？ 何？」

直後、それは極々短い時間しか存在できない世界であることを証明するかの様に嫌な振動が空気を伝わり僕の耳に音となって入ってくる。それは、段ボールの箱を押しつぶしたような、それともスイ

力を落としたような、とにかく気持ちの悪い、不快なそして、鈍い音であった。

目の前で起きた事を理解でない。
いや、理解したくなかった。

しばらくの間を置き、街中の雑音が一つの言葉となって、僕に何が起きたのかを無理矢理でも理解させようとする。

「人が跳ねられたぞ！」

集まってきた人たちの様々な声が聞こえる方向へ向かって、夢の中を漂うような意識と足取りで進んでいく。

(あつ、この感覚はバイクとかで転けたときの感覚に似ている。

全てがコマ送りになって、一秒に満たない時間がすごく長く感じて、立ち上がると足が地面に着いていないような……その後、必ず『夢なんだ』って思うんだ。

でも振り返ると壊れたバイクや痛む体がそんな僕を現実に引き戻す。

でもでも、今回は本当に夢を見ているはずなんだ)

しかし足を一歩進めることに伝わってくる地面からの衝撃が、未だ夢見心地の脳に「現実世界を踏んでいる」という感覚として伝わってくる。

その衝撃が一つ伝わるごとに、少しずつ現実感を取り戻し、それに合わせて歩みも徐々に速くなっていく。

そして人で出来た輪に近づく頃には、完全に意識は現実を取り戻し、目の前で起きた事を臆けながら理解した僕は、そのまま人の円弧を切り裂き中心に向けて駆け込んだ。

そこには、僕の「夢を見ているはず」という淡い願望を完全に打ち砕くかのように、まるで等身大の人形のようになってしまった真菜が横たわっていた。

しかし、僕はなぜ彼女が動かなくなってしまったのか理解できない。

目に映る彼女は厚手の服に守られていたためか、目立った外傷は見当たらない。強いて言えば薄いストッキングが何力所か裂けて、擦りむいた足の傷が気になるくらいだった。

(たいした事がなさそうで、よかった……)

変な安心感がわき起こってくる中、ようやく横たわる真菜に言葉をかける事が出来た。

「足の擦り傷だけなんだろう。目を開けてくれよ」

「たいした事は無いんだろう」

「びっくりして気を失ってるだけなんだろう」

思いついた言葉を次々とかけてみるが、全く無反応の彼女に、さつきまでの変な安心感は消え去り、次第に大きくなってきた不安感が僕の心を埋め出した。

「さつきの事で怒って意地悪しているだけなんだろう」

「本当、ぼちぼち目を開けてくれよ」

奇跡的に傷一つ無い、でも悪夢に怯えながら眠っているような彼女の顔を改めて見たとき、一番考えたくない不安感で完全に心を埋め尽くされ、無理矢理力を入れてここまで駆け込んだ僕の足から、急激に力が抜けて崩れ落ちるように座り込んだ。

「なあ、起きてくれよ」

彼女をそのまま膝の上で抱きかかえた。

「何かの冗談だよな……」

僕自身、何を言っているのか、何を言っているのかわからない。

……

「すみません、救急車を…… どなたか救急車を呼んで下さい」
しばらく口から出す言葉を探した後、ようやく見つけ出した言葉がこの一言だった。

「もう連絡したよ」

「……ありがとうございます」

周りの誰かわからない人の言葉に、僕は振り返る事もしないで、そのまま彼女を膝の上で抱きかかえ居った状態で、一言お礼を言っ
て黙り込んだ。

昼間、二人でいたときにはあんなに温かで優しかった彼女の温もりが、今となっては凍りつくように冷たく伝わってくる。

「温もりを取り戻してくれよ」

彼女の冷たい耳元で囁く。

「また優しく包み込んでくれよ」

「……………」

「今日……今さっきの事だつてまだ仲直りしてないじゃないか」

「……………」

「ごめん、俺が悪かった。だから頼むから目を開けてくれよ」

「……………」

次に出てくる言葉が完全に無くなり、黙り込んだままの真菜を膝の上で抱え込み、どれだけ時間が経っただろうか。

「……………」

彼女が何かを言ったような気配に顔へ視線を向けると、うつすらと目を開けて口を動かしている。

「……………わたし……………のほう……………こそ……………ごめん……………なさい」

今にも消えてしまいそうな声で、真菜はしゃべり出した。

「……………いっぱい愛をくれて……………ありが……………とう……………」

「おい、何言ってるんだ。まだまだこれからじゃないか」

「わたし……………は……………とても幸せ……………」

「馬鹿な事言っていないで二人で愛をもっと大きく育てて、もっと幸せになるつよ。だから……………だから……………だから……………」

「……………本当に……………ありがとう……………」

言葉に詰まり、次の言葉が出てこない僕の話の遮るように、最後にそう言つと真菜は目を閉じて動かなくなってしまった。

「だから……………頼むよ、目を開けてもつと話をしようよ」

「……」

ようやく出た言葉に、真菜から返事が返ってくることはなかった。

実際にはこの時の彼女は一言も話をしていなかったのかもしれない。いや、とても話が出来る状態ではなかったはず。

それでも聞こえてきた彼女の話し声は、そうしてほしいと望んだ僕の意識が幻想を勝手に作り上げ、そして見せた一瞬の夢だったのかもしれない。

しかしその後、彼女の表情は断末魔の瞬間に見た恐怖に怯えていたような冷たい表情から、穏やかな温かい表情となっていた。

彼女の時間はここで終わってしまった。

僕は、その事を理解できた。

しかし、不思議と悲愴感も喪失感もわき起こってこない。

だからといって開き直っているわけでもなく、こんな事態を目前にしながらも、すごく冷静に物事を考えられるようになっていた僕がいた。

それは大切なものを、あまりに簡単に失ってしまったということに対して、呆気にと取られていたのかもしれない。

それとも失ってしまったものが、あまりに大き過ぎたため、僕自身の心がこれ以上感情を流し出させまいとして、氷のように冷たくそして固く閉ざして、守っていたためなのかもしれない。

しかし、そんな自己防衛を吹き飛ばす罪悪感も同時にわき起こってきた。

（なぜ、真菜を抱きかかえる事しか出来なかったのだろう。）

僕は緊急蘇生術を習っていたはず。
なのに、なぜ、何にも出来なかったのだろう。
素人の僕でも処置をしていたら……
真菜は助かったかもしれない)

僕は自分が真菜を死亡させてしまったのかもしれないという、罪の意識に押しつぶされそうになった。

そして罪の重さに耐えかねたように、心の中で何かが音も無く抜け落ちて、何もない空白となってしまった。

今となっては虚しく響きながら近づいてきた救急車のサイレンの音が止まり、救急隊の隊員に僕は真菜から引き離された。

そして、ストレッチャーで運ばれていく彼女を、ただ呆然と見送る事しかできない抜け殻の僕がここにいた。

「もうどうにでもなればいい」

絶望の淵に向かって歩き出そうとしたその時だった。

何も無いと思っていた心の空白に、小さく輝く光が見えた。

『心に誓いなさい。』

必ずここに帰って、罪を償うと』

何が起きたのかわからなかったが、誓いを促された僕は何も考えないで返事をしていた。

「はい、誓います」

例えそれが夢物語だったとしても……

その時 2 (後書き)

読み進めていただき、ありがとうございました。
区切りがうまく出来ないで、少し長くなってしまいました。

その時 3

あの時、例え夢物語でもいいと思いつながら心にも心に誓ったことが、現実となつて僕自身に起きています。

白光の中から帰ってきた僕は、自由になる体を使ってどの『選択の決断』を行うか考えようとした。

(いや、考えてちゃだめだ、行動するんだ)

周りを見渡すと、時の止まったモノクロームの街は既に色を取り戻し、今にも動き出そうとしている。

(まずい、時間が無い)

徐々に薄れていく意識の中、もう一人の僕の声が聞こえた。

「じゃあ、送っていくよ」

「ここでいい、一人で帰るから」

そう言つと真菜は自宅方向に向きを変えて歩き始めた。

意地になつていた僕は彼女の方を振り向くこともしないで歩き出した。

「もう意地になつている場合じゃない！

あんな思いはもうしたくないんだ！」

消えかけた意識で最後の命令を僕自身の体に送り出す。

立ち止まって振り返ると一人信号待ちをしている彼女の後ろ姿が見える。

寂しそうなその姿を見ているうちに、僕は彼女に向かって駆け出

した。

(ごめん、そうなんだ。あの時素直に真菜に駆け寄って止めていれば、真菜を、そして恋愛という感情を失う事はなかったんだ)

『私の方こそ、あなたを縛り付けてしまいましたね。』

『ごめんなさい』

走りながら頭に浮かんだ気持ちに聞き覚えのある声が答えるように話しかけてきた。

「えっ！」

忘れ去られた感情の欠片の声と、真菜の声が、そして最後に聞こえた彼女の言葉が僕の頭の中で交差した。

『今まで私にいっぱい愛をくれて、ありがとう』

初めて「声」を聞いた時、どこか懐かしく聞き覚えがあったのに、それが真菜の声だったと今まで思い出せないでいた。

「ごめん、真菜……」

『私はそれでも今、とても幸せです』

「この僕と真菜はもうすぐ消えちゃうんだろう。」

でも、なんとか間に合いそうだよ」

真菜に駆け寄った僕は、彼女の手をつかんだ。

『新しい私、そしてこれからの時間……命を取り戻してくれて、本当にありがとう。』

『真菜は幸せです』

突然手をつかまれてびっくりした彼女は、反射的に手を振り払いながら振り向き、さらには空いている右側の手を振り上げていた。

「ごめん。でも、今日は一人で帰っちゃだめなんだ」

振り向いた彼女と目が合ったと同時に、咄嗟に頭に浮かんだ言葉を僕は言い放っていた。

「ふっ……何、それ」

ほんの少しの間を開けて、状況を把握した彼女が吹き出すのをこらえながら言った。

「あっ、いや……なんとというか……今日はごめん。だから『一人で帰る』なんて言わないでくれよ」

僕は先ほど彼女に伝えたかった事を、言葉を組み直して言い直した。

「私、なんだか今日はものすごく不安な気持ちだったの」
そう言つと彼女は自分の気持ちを解き放つかのように言葉を続けた。

「今までの、楽しくて幸せな日々が今日で終わってしまうんじゃないかと……何故だかそんな風感じていたの」

未だに不安を取り除けないでいる彼女の両肩に手を回し、そして抱き寄せた僕の視界に青に変わった歩行者信号が写った。

その直後、ものすごいスピードで一台の車が横断歩道を横切り走り去っていった。

多分赤信号を無視して突っ込んできたのだろう。横断歩道を渡っていたのなら、間違いなく轢かれているタイミングだった。

「大丈夫、もう全ての悪夢は過ぎ去ったよ」
「うん、ありがとう」

この言葉を真菜から聞いた直後、タイムスリップをしたときと同じような現象が始まった。

しかし今回は白光に包まれたところで止まっている。

「あつ、時の流れが止まって、この僕も消滅する時が来たのか……」
やがて、僕を包んでいた白光は崩れるように範囲を狭くしていった。

しばらくの後、わずかに残った白光の中から欠片の真菜が差し出してきた手に導かれ、意識の僕もその白光に溶け込んでいった。

(やっぱり真菜の温もりを感じている時が一番安心できるよ。

さて、最後に僕自身に伝えてくるよ。聞こえるのかどうかはわからないけど……)

おい、後は任せたよ、これからの僕、二人で愛を大きく育ててくれよ)

「えっ？ 何だ？」

「どうしたの？」

「あつ、いや、ちょっとね」

「だから、どうしたのよ」

拳動不審の僕に彼女が問いつめてくる。

「たしか、一度別れたよね」

「そうよ」

「その後の記憶が今一はつきりしないんだが……」

「何を言ってるのよ。私を追いかけてきたんじゃない」

「うーん、そうしていた気はするんだけど……」

「はつきりしないのね。そのあと私に謝って、で、抱きしめてくれるじゃない」

「いや、そういう事じゃなくて、なんて言っているのか……」

今の僕は完全に意識と記憶と現実が混乱している。

「何をしていたのか覚えていない訳じゃないんだ。さっきまで今の僕の意志で行動していた訳じゃなくて、今の僕の中にもう一人の僕が勝手にこの体を使って行動しているのを今の僕が見ていた……かな」

「あん、もういいわよ。とにかく私の心の不安はすっかり無くなって、今はとっても気分がいいのよ。」

……本当にありがとう」

僕の言っている意味不明の言葉に半ば呆れ顔だった彼女であったが、最後にちよつとだけ照れ顔でつぶやいた。

気がつくと、今日一日あれだけ耳障りだった街中の雑音は、普段の音となって聞こえる。そして漆黒の闇に見えた夜空も、薄くなつた雲をすり抜けた月明かりが街を優しく照らし、その切れ間から星も見える。

「僕もすっかり不安は無くなったよ。」

ありがとう。なんだかわからないうちに崩れそうになつた心を救ってくれたんだ。

それにしても心底恋して、そして愛した真菜の大切さがわかつたよ。

心から愛しているよ」

不安から解放されて軽くなったからか、普段なら恥ずかしくて口に出れない言葉をさらりと行ってしまった。

「なっ、なっ、何言い出すのよ！」

普段聞けない言葉を、面と向かって、しかも真面目に聞かされた彼女は耳まで桜色に染めていた。

「真菜、本当に好きだよ、そして愛してるよ」

彼女の予想通りの反応に僕はちよつとした悪戯心から、もう一度直撃弾を放った。

「わっ、わっ、わかったわよ、もう……」

もう少し遊びたかったが、これ以上言うと悪戯がばれて本格的に彼女が怒りそうなので、話題を変える事にした。

「さて、今日はこの辺で勘弁してやる。

と、いうことで、送っていくよ」

「じゃあ、その心から愛している私を傷一つつけないように大切に送り届けてよ」

「了解しました。お姫様」

そう言つと、僕は彼女の手を取り歩き出した。

帰り道、真菜からあふれる可愛い、そして素敵な笑顔を見て、僕は初めて大切なものが直ぐ近くにある事を知った。

その時 3 (後書き)

読み進めていただき、ありがとうございます。
次回が最終話となる予定です。

そして……

三年になった僕たちは夏休みが訪れる迄の間、それまでと変わらない時を過ごしていた。

しかし、残念ながら二人の進路が大きく違う事がはっきりわかった頃から、あれほど熱く燃えていた炎は徐々に小さくなり冷めていった。

それでも細々とつないでいた心の絆だったが……

春になり真菜は東京の大学に進学し、そして僕は地方の専門学校に進んだ。

一度離れた二人の心の間に距離という物理的、そして「支えてほしい時に近くにいない」という精神的にも大きな壁が立ちはだかり、再び深く結びつくのを拒んだ。

進学して初めの冬休み、偶然街で会った僕と真菜は、近況それぞれお互い新しく出来た心の支えの話をした。

それを最後に僕たちは、二人で紡いだ甘く優しく熱く、そして幸せだった時に終止符を打った。

そして……

結婚を翌日に控えた独身最後の夜、部屋の明かりを落とし、先ほど飲んだコーヒーの空き缶を片手に、それを見つめながら彼女と歩んだ二年間を振り返った。

「あの日、缶コーヒーをご馳走して終わるはずだったのに、その約

束を忘れたために結婚することになったんだ」

ちよつとしたゲーム感覚で行った事の結果で、ほんの些細なきっかけであった。

あの時、たまたま近くにいたのが彼女だったからこそ、このゲームできっかけをつかもうと思つて声をかけた。

(実際、人生なんてどう転ぶかわかったもんじゃない)

振り返つた結果が、この一言でまとまるなんて少々情けなかったのだが……

でも今、幸せかと聞かれれば、当然「幸せです」と笑つて答える事が出来る。

それは十年前に終止符を打つた大きな恋愛をも凌ぐ恋愛を今しているから。

そして、まだ半分以上残っている僕と彼女の時間を、最後のひと時まで重なり合つて紡いでいく事が出来ると信じているから。

そして……（後書き）

最後までのお付き合い、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4796t/>

おもいで巡る空

2011年6月10日07時14分発行